

俳諧行脚

全

~ 5

5658



Handwritten text in a cursive script, likely a signature or a name, written vertically on the left page of the manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper.

門  
5658  
巻

誦詣行脚略曆

尾張

吉良のつとむしをくしの柳にたりちをうら  
この寺を詣りてはりし時ちゆをあらはし  
二月廿二日

伊勢

二月廿三日 伊勢のつとむしをくしの柳に  
たりちをうら

江戸

二月廿四日 江戸のつとむしをくしの柳に  
たりちをうら

奥州

○卯の日のつとむしをくしの柳にたりちをうら  
二月廿五日 奥州のつとむしをくしの柳に  
たりちをうら

総持

あまのつとむしをくしの柳にたりちをうら  
二月廿六日 総持のつとむしをくしの柳に  
たりちをうら

甲斐

二月廿七日 甲斐のつとむしをくしの柳に  
たりちをうら

大坂

二月廿八日 大坂のつとむしをくしの柳に  
たりちをうら

出羽

二月廿九日 出羽のつとむしをくしの柳に  
たりちをうら

京

三月一日 京のつとむしをくしの柳に  
たりちをうら

近江

三月二日 近江のつとむしをくしの柳に  
たりちをうら

印  
5658  
巻

信州

信州の山を登りて見れば  
足下は雲の海なり  
巨艦のふらふらと  
波を打つる如し  
○信州の  
水は清く山は青く

播磨

年中の風光

六弦磨の年より  
細くもろくも  
人の心は  
風流の足

旅窓春真

秋香菴

筆北

高砂

親の書

筆

花

梅の花



大江九延年之  
詩筆

句順任先例

八十三首

中々山も物もまじりて初より三巻  
 常あはれを流し置てふもや終に南山  
 物達の長草とては子見果 越市  
 糸四山山吹くはたし種の中里江  
 春の両花をのり種のみ思ひをう三巴  
 咲神のひたれを去る松の心を喬  
 厚を子結つ種をう習のこを青を  
 山守を心や持りおぼろの月柳髪



松のあも神打とや松の内遠志  
 啼止しやう川ま志のお心於有都  
 柳とて舟を揚目し梅屋も雷乳  
 能事とた破て出流を柳う果野遠  
 夕柳暮とじしこもなるをたりまみ  
 こころあもいんおまをせぬらむも志  
 梅をまはらつ柳りらんうらまをみ葉飛  
 峯うふ村山伏の門出う柳二巻を  
 山中の梅よとてまふあうやまを雀

南極星の

天の  
 星の  
 光り



好むも初めてや産の心空る幸倉  
 居らるのよやまの河の砂の上へ西  
 草のひらきまなひ焼くまの千車  
 柿のあむれお積むる白螺親里  
 年々此代白もはし門の松荒河  
 春の中お毎花の水もむむより五周  
 泊の竿細木と結し柳の巨葉  
 算のそや末の心のお常事なる宜召  
 あらむく斗のたはた葉の打井晴

柿壺重



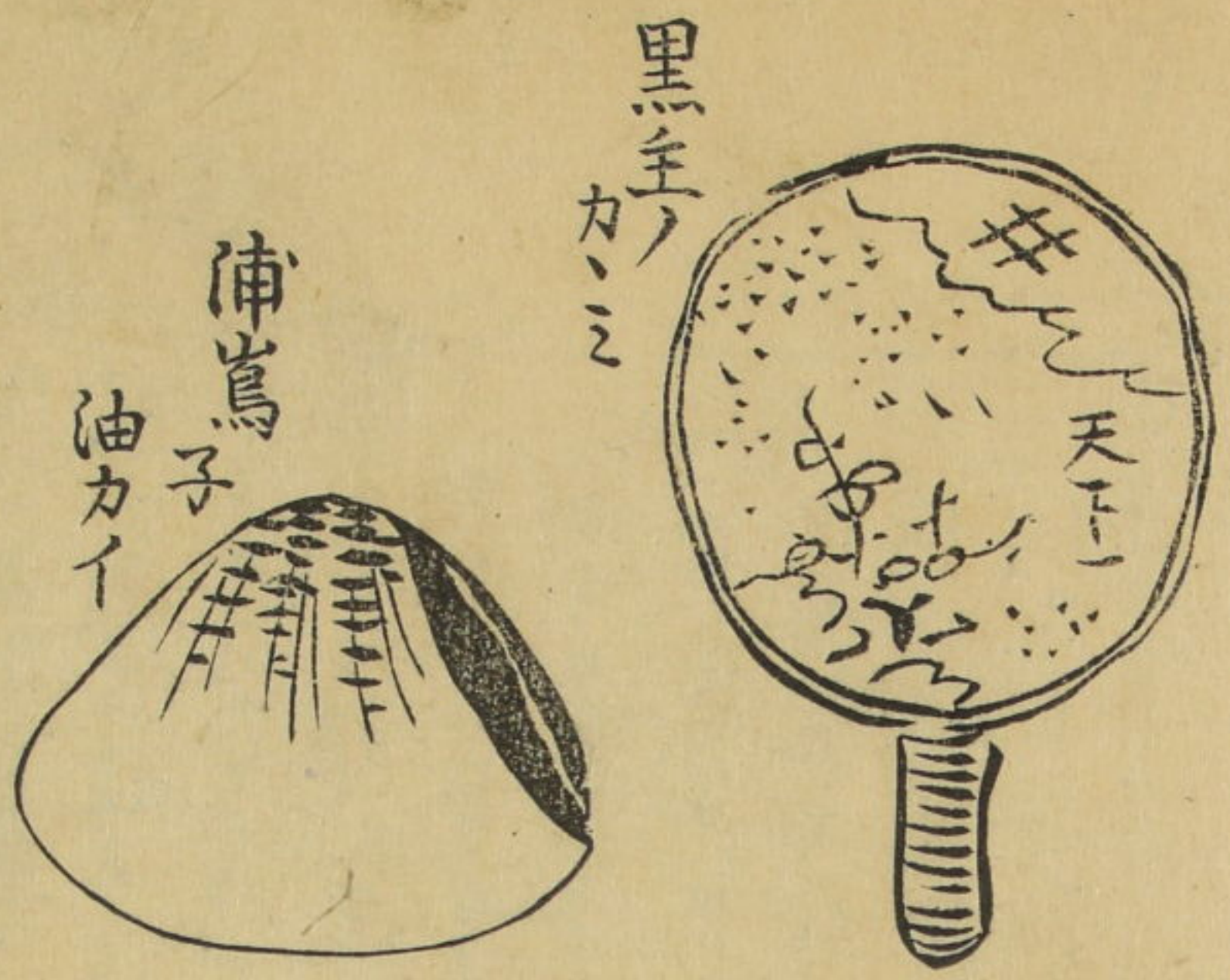
志ごとく合歡の葉もやぐさのい徳竹  
 響るや風を裂きたる柳ころも青楓  
 維子つて羽織もまろく切書巨苓  
 ねごとく時木の松のうらみより益雁  
 響るやよこころの清し明もて不遠  
 細布結水も結するや結る阿波  
 砂あひるをみ流遊すあひひくあま山  
 白梅の磨く空の光の舟舟極  
 雲汁のとりは庭やる櫓有麦



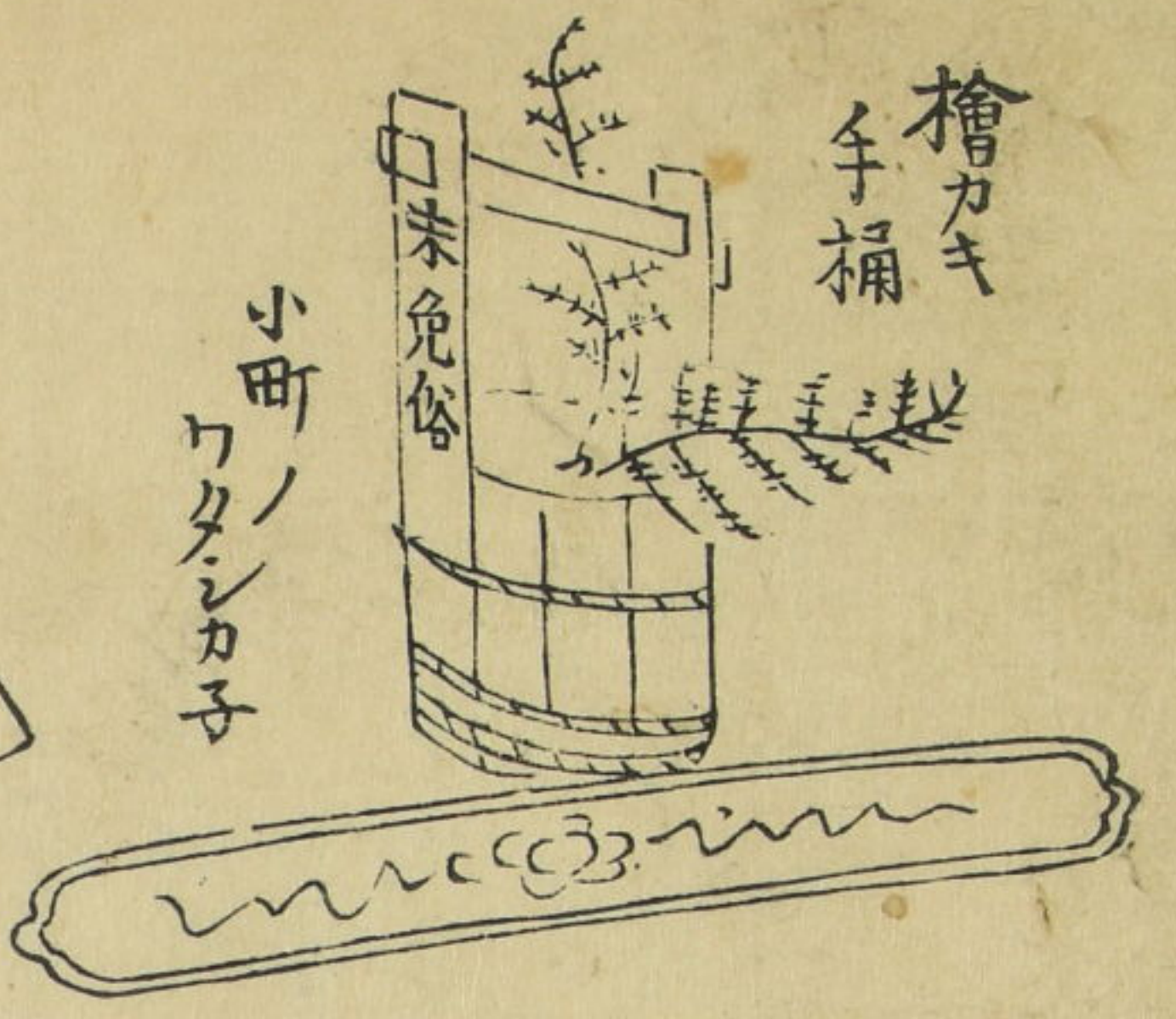
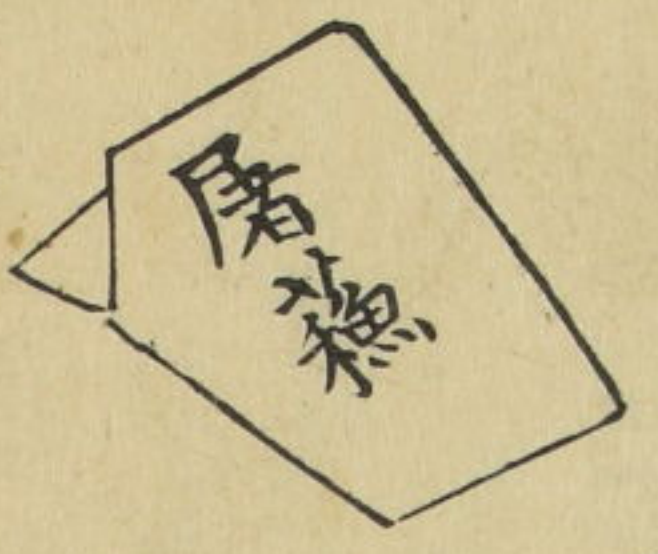




東都二先生  
珍藏  
遷竹寫



蓬萊ノ茶



忠岑のありけりては梅の花春城  
 古の水春のよきいしこよて完来  
 法皇御座のよき遊解安き寒松  
 又人のけいさは何のいもあきのさす来  
 柳海と出ちるよのちるをたり梅文  
 いの事もおぼかりぬくの梅はも  
 而路もあつておぼかりぬくの梅はも  
 花移つてのちも梅咲日増し成美  
 る遊ひの集せては梅の門の春其堂

新年風交 兵庫

雪もやちらとぬのあつては秋湖  
 正月の佛もあつてはつての延命丸  
 臨の梅は梅さつてあつては智徳  
 法もつと明もあつてはつては乙村  
 梅もあつてはつてはつては古陵  
 大和路も馬の上吹雪の風文海  
 日もあつてはつてはつては邦在  
 雪もあつてはつてはつては蓮る



因瑞筆

ふ殿の如く思ふ物并たふ子就  
春の風おのの松を吹る也  
柳よりこゆたふ二ののれは  
在 京

若くは下取り物も後柄柄  
ぬる物もたはのしきも  
明石

明石

物のおもたふてたふも  
近きのもたふてたふ物  
のちりてたふ

堪忍のふら松  
メしては  
天下のふら松  
と



會春盤思梅園  
有中筆

くつとてたふのちりてたふ  
春のちりてたふのちりてたふ  
ま柳やかたの川花もたふ  
魚海

白物のちりてたふのちりてたふ  
たふのちりてたふのちりてたふ  
たふのちりてたふのちりてたふ  
高 敬

たふのちりてたふのちりてたふ  
文 山



銷入道壽嗣



金時祀山神

句難坊評霍芝



常小志。一海并土子の梅の花暮院

臨時客

此二回折

吾のあはれをまきつぬ月夜岳路  
 ち御ふとらくくおつ移りも方明  
 梢うらまはの梅や救の梅莫二  
 春ふはあし灰吹たし梅のふ此坊  
 山子花洲山堂のあまのやわらび  
 春ふや山まのんふとらくくく梅



神人頼永古瓦



斗藪會遊仙



伏不忘山干野楮

山とや海をばまぐ梅の花海峯  
 雲まら〜瓶の梅の香まら〜二柳  
 朝ふ〜松のやまは〜のふ〜光宗  
 朝ふのふふあわい家おま〜石分  
 朝ふのふ〜あま〜のふ〜ひ子  
 年津の神のふあま〜梅の花のふ  
あまのふあまのふ  
あまのふあまのふ  
 狐草とあまのふ〜のふ〜  
 けいあまのふ〜のふ〜

小隱美次年度



西艶挑善光



右色紙八枚

長齋圖

ふり出らるる出つての事も為事測

まのふえー出らるるし物もふ相業

松とせい吹しあはして春のうせ斗入

梅のふ正月抄とことと取らるる去

はる物の手をひたしあはし烟を馬印

物も矯しはすこの今朝の山火宛

連面の外は遠くも福もふふあはるる。  
左運の向もあはしー物もあはるる集事。  
加ふるもあはるる也

箕野やんをききき山一ワ路川

松風菴

風花の海うききき梅の国村

霍声居

在于時享和二年壬戌正月吉辰秋香菴主  
大坂柿壺客中就需飛校早

壽梓

平安 勝田芦涯

東都 江川八左衛門



書林

京御幸町錦小路七

勝田喜右衛門

